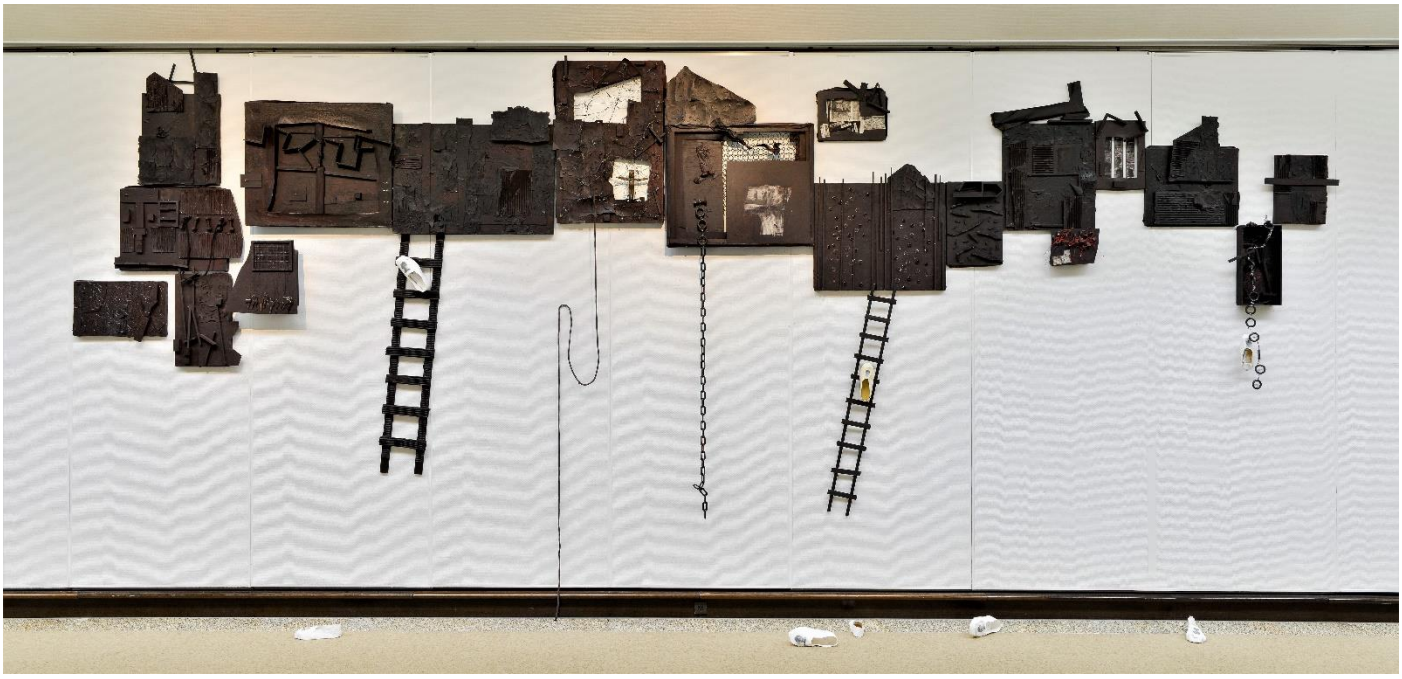
PRESS　RELEASE

上條陽子とガザの画家たち　希望へ・・・展

2022 年 4 月 22 日(金)～6 月 13 日(日)

会場：佐喜眞美術館　主催：佐喜眞美術館



上條陽子　〈壁〉2017 年　ミクストメディア

新人洋画家の登竜門で芸術界の芥川賞ともいわれた安井賞を女性として初めて受賞し、新進気鋭の画家であった上條陽子氏は、その後彼女を襲った大病を克服すると 1999 年パレスチナでのグループ展に参加しました。以来、その関係は現在も続けられ、実に 23 年にも及びます。周囲は高さ８ｍの壁に囲まれた「パレスチナ自治区・ガザ」は、「屋根のない監獄」とも称され、移動の自由を奪われた１９９万人が閉じ込められています。いまなおイスラエルによる爆撃が絶えず、紛争解決の糸口さえ見えません。しかし、その瓦礫の街にも尊厳と希望を持つ人間の営みが豊かに息づき、優れた芸術家が活動を続けています。昨年６月の NHK 日曜美術館でも「壁を越える　パレスチナ　ガザの画家と上條陽子」として特集が放映されました。

今展では、上條氏の新作を含む作品約 40 点（ドローイング含む）と今年３月にガザから届いた日本初公開の作品 14 点を含むガザの作家 7 人の作品 38 点を紹介します。芸術活動は、絶望的な状況であっても人間の尊厳を守り、希望を実現していく根源的な力であることを証明する作品群です。

作家プロフィール

上條陽子（かみじょう・ようこ）　略歴

1937年神奈川県横浜市生まれ。1978年〈玄黄（兆）〉で第21回安井賞受賞。1982－83年文化庁在外研究員で渡欧。1986年大病を患い2度の大手術。1999年「東京からの七天使」展の巡回展で初めてパレスチナを訪れる。2001年「パレスチナのハートアートプロジェクト（ＰＨＡＰ）」を主宰、以後レバノンのパレスチナ難民キャンプで子どもたちの絵画指導や展示を行う。2019年パレスチナ・ガザから3人の画家の来日が実現、「パレスチナ、ガザの画家を支援する交流展」が相模原市民ギャラリー他全国10ヶ所で巡回展が開催される。2021年ＮＨＫ日曜美術館にて「壁を越える　～パレスチナ・ガザの画家と上條陽子～」として特集される。国内外で個展、グループ展多数。

［ガザの画家たち］

モハメド・アル・ハワジリ　Mohammad Al-Hawajri

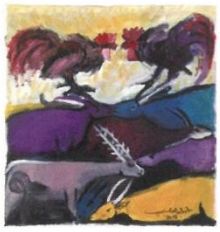
1976年、ガザ、ソレイユ難民キャンプで生まれる。国外の多くの国から展覧会に招待される。作品はコレクションされている。

ソヘイル・セレイム　Sohail Salem

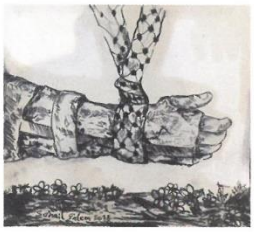
1974年、ガザで生まる。
アルアクサ大学美術学士号取得。フランス他、国外から招待出品。

ライエッド・イサ　Raed Issa

1975年、ガザの難民キャンプで生まれる。
ガザの現代美術エルチカグループの創立者の一人。国外で活躍。
イタリアローマの国際美術賞を受賞。



モハメド・アル・ハワジリ



ソヘイル・セレイム

ライエッド・イサ

日本での展覧会初参加作家

ディナ・マタール　Dina Matar

1985年、ガザで生まれる。ガザのアルアクサ大学美術学士号取得。ヨーロッパのアーティストといくつかのプロジェクトに協力しながら、国際展示会にも出品。

ムハマンド・アブサール　Mohamed Abusal

1976年、ガザの難民キャンプで生まれる。ガザ・イスラーム大学で経営学の学士号を取得後、米国のマクロメディア大学マルチメディア学位取得。国外で個展・受賞多数。

アブドゥル・ラウーフ・アル＝アジューリー　Abdel Raouf Al Ajouri

1977年、ガザの難民キャンプで生まれる。ガザのアルアクサ大学美術教育学士号取得。美術教育の役職を歴任し、現在は現代アーティスト集団「エルティカ・アーティストハウス」のアートディレクターを努める。

ムハマンド・アッ＝ダブス　Mohammed Al dabous

1978年、ガザの難民キャンプで生まれる。カイロのヘルワン大学で美術学士号を取得。ガザのアルアクサ大学芸術学科講師。国内外多数の国際展参加。

【上條陽子作品】

1999 年から 23 年間、アートを通してパレスチナと深く交流を続けてきた上條は、自身の作品にも変化が現れます。特に、不可能に近いと言われていた 2019 年にガザから 3 人の作家を日本に招聘し、全国各地で展覧会開催を成し遂げた後は、長い間真っ黒な画面ばかりだった上條の作品が色彩豊かなものとなりました。また、パレスチナと関りながら、1945 年の戦争当時 8 歳だった上條は、横浜で B29 が雨が降ってくるように投下した焼夷弾のなかを生き延びた経験を思い起こしていきます。

何があっても戦争をしてはいけない。その思いは、「いのち」の豊かさ、溢れる生命力が自由な形とさまざまな色彩となり、会場を圧倒します。

〈壁〉2017 年 ― 帰れると思い持ち出したままの鍵。その家はいまなお高さ 8 mの壁の向こうにある
〈血の花嫁〉2013－15 年－白いドレスは戦争で死んだひとりひとりの「かたち」
〈マグマ〉2019－20 年 ― 招聘したガザの画家 3 人が帰国後、いのちへの衝動にかられてできた作品
〈希望のガザ〉2021 年 －間近に死があるからこそ自分は生きる／家族が殺された分まで自分は生きたい、生きてやろう

その他、沖縄を思い制作された新作〈あやとり〉〈密林ジャングル〉〈ガマ〉など。

〈マグマ〉201-2020

〈血の花嫁〉2013-15

【ガザの画家の作品】

ガザ出身の仲間と立ち上げた現代アートギャラリー「Eltiqa エルティカ」の主要メンバー7 人

※2021 年 6 月に放映されたＮＨＫ日曜美術館「壁を超える～パレスチナ・ガザの画家と上條陽子」より

ソヘイル・セレイム

「誰もが戦争から逃れられない、たとえ生き残っても戦争のあとには何かが自分の中で壊れてしまう。大切な友達や兄弟や家族を失うかもしれない。その痛みは一生続くのです。」

「私たちが絶対に屈しないのは、祖国パレスチナの他に代わるものはないからです。…家族や友人たちや隣人たちと共にいてそして海がある。それが私たちに屈することなくガザで生き続ける希望を与えてくれます。いつの日か私たちが追い出されたパレスチナの村に帰る日が来ることを願っている」

ライエッド・イサ

「私たちパレスチナ人は、サボテンのようなものです。水を我慢し、空腹を我慢し、封鎖を我慢する。私たちにも生活があり、文化があり、人生を愛している日常を送っている。それを日本の人たちに伝えたくて作品を送った。」

「2014 年の爆撃で家とアトリエが破壊された。力強く生き続けるために闘うということにも慣れている。作品を失い心理的にもひどい状況にあったが、あくまでも描き続けることを決意している。」

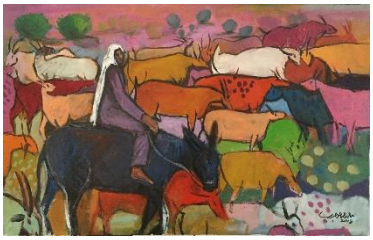
モハメド・アル・ハワジリ

「私は子供の頃に動物たちと仲良くしていたことを忘れずにいます。ガザには辛い現実があります。その現実から逃避しようとして動物たちを描いています。描いてるときは楽しむことができます。私が鮮やかな色を使うのは、見る人に喜びをもたらしたいから。私にとってアートとは呼吸をするための肺のようなものです。」

「自分で発明した材料を使うとき、私は誇りに思う。なぜならその瞬間、自分が生きている状況に打ち勝ったことになるから。ガザの人間は力強く負けずに生きている。力強さがないと生きられない。生活に必要なものを失ったにもかかわらず、道を歩けば人々は微笑んでいる。困難な状況でも意思の力があり、不屈の姿勢があることの証拠だ。」

ライエッド・イサ

ソヘイル・セレイム

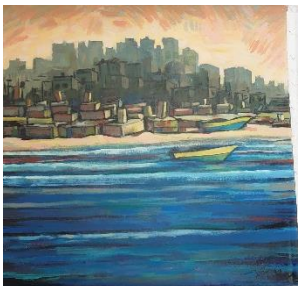


モハメド・アル・ハワジリ

アブドゥル・ラウーフ・アル＝アジューリー

ディナ・マタール

ムハマンド・アブサール



ムハマンド・アッ＝ダブス

【常設展示　丸木位里・丸木俊　《沖縄戦の図》1984 年】

丸木位里・丸木俊　《沖縄戦の図》1984 年　400×850m

広島・長崎に原爆が投下され、人類が初めて体験した核爆弾の問題を３０年以上にわたり《原爆の図》（全 15 部）に描き、世界に発信し続けた丸木位里（1901-1995）・丸木俊（1912-2000）。丸木夫妻が晩年になり取り組んだのが「地上戦を体験した沖縄戦」でした。地上戦を知らない日本本土の私たちは、沖縄の人たちから学ばなければならない、と沖縄各地を訪ね「現場」で話を聞き、6 年の歳月をかけて制作された《沖縄戦の図》14 部は、山脈のようなふたりの画業の集大成となりました。

「沖縄はどう考えても今度の戦争で一番大変なことがおこっとる。原爆をかき、南京大虐殺をかき、アウシュビッツをかいたが、沖縄を描くことが一番戦争を描いたことになる」（位里）

「これは私達と沖縄の人たちとの共同制作です」「戦争というものを、簡単に考えてはいけないのです。日本が負けた、アメリカが勝ったということではなく、一番大事なことがかくされて来た、このことを知り深く掘り下げて考えていかなければなりません。」（俊）

丸木夫妻の「人間といのち」への深い鎮魂と洞察、また地上戦を生き延びた沖縄の人びとの、どんなことがあっても生きなさい、という「命どぅ宝（ヌチドゥタカラ、命こそ宝）」への決意が込められた《沖縄戦の図》は、戦争を体験した上條陽子の作品に込めた次世代への願いといまなお闘いのなかにあるガザの画家たちの未来への希望が、米軍普天間基地に隣接する佐喜眞美術館の空間で深く共鳴します。

【イベント】※両日とも参加は入館料のみ　取材は無料です

4月22日(金)　11時～　オープニング

作家・上條陽子による作品解説

※作品制作の背景、沖縄で展示する思い、パレスチナとの関りなどを解説いたします

4月23日(土)　15時～17時　※要予約　人数制限あり

ギャラリー・トーク「ガザ：壁の中の画家たち」

上條 陽子（画家）

原口 美早紀（映像ディレクター）

（NHK日曜美術館「壁を超える～パレスチナ・ガザの画家と上條陽子～」担当）

佐喜眞 道夫（佐喜眞美術館館長）

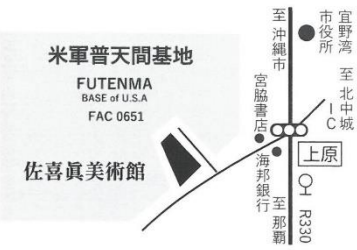
ガザについて

ガザとは、パレスチナ南西端、シナイ半島の北東に接し地中海沿いに長さ約45㎞、幅6～10㎞の区域のこと。1993年にイスラエルとPLO（パレスチナ解放機構）の間で結ばれた「オスロ合意」により、翌年ガザ地区は、ヨルダン川西岸地区と共に「パレスチナ自治区」になる。しかし現在ガザはイスラエルに軍事封鎖されている。イスラエルは 2008、2009、2012、2014年とガザに大規模軍事侵攻を行い、大きな被害をもたらした。ガザの出入口は、北のエレツと南のラファの2ヶ所のみ。境界は高さ8mの壁に囲まれ、海上も封鎖されている。出入国はイスラエルのコントロール下にあり、パレスチナ人がガザを出入りする自由はない。まさに〈屋根のない刑務所〉である。

※2021年5月にもイスラエル軍による昼夜を問わないガザへの空爆により約1600人の死傷者がでた。（参考　ブリタニカ国際大百科辞典 小項目辞典）

佐喜眞美術館
http://sakima.jp/

〒901-2204　沖縄県宜野湾市上原358
TEL 098-893-5737　FAX 098-893-6948

開館時間　9:30～17:00（火曜休館）
入館料　大人… 800円（730）／
大学生・シルバー［70歳以上］… 700円（630）
中高… 600円（540）／小人… 300円（200）
※（　）内は20名以上　団体料金

常設展示：丸木位里・丸木俊「沖縄戦の図」